新収蔵品紹介
小林勇旧蔵　柳瀬正夢コレクション

長井　　健

はじめに

愛媛県松山市出身の画家・柳瀬正夢（1900－1945）は、福岡県門司市（現・北九州市）で少年期を過ごし、15歳で《河と降る光と》（武蔵野美術大学美術館・図書館蔵）が第2回再興院展に入選、10代の頃から門司で個展を開催して支援者を得つつ、さらに北九州の美術運動にも加わるなど、若い時期から目覚ましく活動した。20歳頃から活動の拠点を東京に移すと、読売新聞社に入社し、ジャーナリズムの仕事を手がけたほか、大正期新興美術運動やプロレタリア美術運動に加わり、漫画やグラフィックデザインなどにも活躍の場を広げた。昭和7年（1932）、治安維持法違反容疑で逮捕されたが、翌年保釈後は再び油絵を描いた。以後は全国各地や中国大陸を訪れ、その風景や人物をモティーフにした作品を次々に制作するも、同20年（1945）5月に新宿駅で空襲に遭い45歳で死去した。大正期から昭和戦前・戦中期にかけて、油彩画、グラフィックデザイン、諷刺画、漫画、写真、絵本、俳句等多方面にわたって展開した柳瀬の先駆的な活動は、今日の近代日本美術史において高く評価されている。

当館はすでに、油彩画約40点、素描・新聞漫画の原画等約110点に及ぶ柳瀬作品を収蔵しており、国内屈指のコレクションを築いているが、昨年（平成28年）度、さらに8点の作品を新たに収蔵することができた。この新収蔵品は全て、柳瀬の親友であった小林勇（1903－1981／鉄塔書院、岩波書店代表。文筆家、画家としても活動）が旧蔵していたもので、このうち多くは、これまでに開催された柳瀬正夢展でも紹介されてきた。逮捕、そして勾留中の妻の死を経て、保釈後も失意の底にあった柳瀬に再び油彩制作を勧め、作家としての再起を励まし続けたのは小林その人であったが、今回の新収蔵作品は、柳瀬が最も信頼を置いていた人物との関係性を示すものであり、また「第2次油絵時代」とも言われる保釈後の数年間（1930年代）に制作された作品を含んでおり、柳瀬の画業の中でも、大きな意味を持っている。

以下、本稿では、紹介を兼ねて、小林勇旧蔵のこれらの作品を改めて詳しく見ていくことにしたい。

1　本コレクションの概要

本コレクション8点の概要は、以下の通り。

⑴《黒の毛繻い》（図1）
　制作年：昭和5年（1930）頃
　技法・素材：水彩・紙（色紙）
　サイズ：縦27.0㎝×横24.1㎝
　サイン：画面左上に「正夢」朱文方印

⑵《雛人形》（図2）
　制作年：昭和8年（1933）
　技法・素材：水彩・紙（色紙）
　サイズ：縦26.0×横23.5㎝
　サイン：画面左下に「⊘」

⑶《Kの像》（図3）
　制作年：昭和9年（1934）
　技法・素材：油彩・板
　サイズ：縦45.6㎝×横38.2㎝
　サイン：画面右上に「⊘」
　　裏面に「No.1／1934.6 Maçame.Y／Kの像」

⑷《人形（お使ひ）》（図4）
　制作年：1930年代
　技法・素材：油彩・板
　サイズ：縦18.0㎝×横13.0㎝
　サイン：画面右下に「Я.⊘」
　　裏面に「人形（お使ひ）柳瀬正夢」

⑸《魚》（図5）
　制作年：1930年代
　技法・素材：油彩・板
　サイズ：縦9.5㎝×横8.0㎝
　サイン：画面右下に「⊘」

⑹《大同の石仏　第一窟西面壁の一部》（図6）
制作年：昭和13年（1938）
技法・素材：水彩・紙
サイズ：縦25.6㎝×横33.2㎝
サイン：画面右下に「38Я ⊘」
⑺《おでん屋のん兵衛（手拭い原画）》（図7）
制作年：不詳
技法・素材：墨、水彩、鉛筆・紙
サイズ：縦31.5㎝×横94.5㎝
サイン：画面中央やや右に「正夢」
⑻《鍾馗》（図8）
制作年：不詳
技法・材質：絹本着色（まくり）
サイズ：縦132.0㎝×横30.3㎝
サイン：画面中央左に「正夢」朱文方印

2　柳瀬と小林勇―《黒の毛繕い》《雛人形》そして《Kの像》

以上8点の作品のうち、《黒の毛繕い》《雛人形》《Kの像》の3点については、小林勇自身が、柳瀬没後に著した随筆[1]の中で、その制作経緯や画題に言及している。

小林の回想によれば、柳瀬と小林が出会ったのは昭和3年（1928）[2]。小林が岩波書店から独立し、自身の出版者である鉄塔書院を立ち上げる時期であった。哲学者・三木清や歴史家・羽仁五郎らを介して知り合った二人は急速に親しくなっていき、小林曰く「その友情は、溺れるような状態であった」という。柳瀬は鉄塔書院から出版された書籍の装丁を次々に手掛けた。

●《黒の毛繕い》

《黒の毛繕い》は二人の友情が深まっていった頃に制作されたものと思われる。昭和5年（1930）頃、当時鉄塔書院では鼠が出るのを見た柳瀬が「僕の家にペルシャ猫が来たよ。真黒で金色の眼で」と小林に自慢したが、小林は“黒”という名のこの猫を強引に柳瀬宅から連れ出し、そのまま鉄塔書院で大切に飼われることになった[3]。色紙に水彩でさらりと描かれた小品ながら、絵の具の滲みで猫の毛のツヤが巧みに表現されている。

●《雛人形》

その後、柳瀬はプロレタリア運動に深く関わったことで、昭和7年（1932）11月5日早朝、自宅にやって来た特高により治安維持法違反容疑で逮捕される。世田谷警察署に連行、留置されて壮絶な拷問を受けた。しかし結局、柳瀬は容疑について一切口を開くことはなく、特高たちも諦めて、拷問をやめ、取り調べるだけの日々になり、次第に柳瀬は皆に好意を持たれるようになっていったという。翌年になると、特高たちの計らいにより、小夜子（梅子）夫人や下川凹天ら漫画家仲間たちとの面会が許されるようになっていた。凹天らは色紙を持っていき、「柳瀬を大事にしてやってくれ」という意味を込めて特高たちに絵を描いてやり、彼らがこの時持参した色紙や絵の具がそのまま置いていかれた。昭和8年（1933）2月、小夜子夫人が面会に行くと、特高たちが気を利かして部屋を出て行った間に、柳瀬は色紙2枚に素早く絵を描き、夫人の着物の背中に押し込んだ。その1枚がこの《雛人形》であり、もう1枚が世田谷警察署の二階の窓から眺めた風景を描いた《雪景色》（個人蔵、図9）として残されている。《雛人形》は、小林の妹の長女の初節句が近いので描いてやったもので、柳瀬は小夜子夫人に渡す際「小林に届けろ」と託したという。今回収蔵するにあたって作品の調査を進めていた際、小林の長女・小松美沙子氏を訪ねて、柳瀬と小林のエピソードをいろいろと聞かせていただいたが、この《雛人形》は、女雛が男雛よりもずっと大きく描かれているところに、「女の子（＝小林の妹の長女）よ、頑張れ」というメッセージが感じられ、柳瀬を知る人なら誰しもが忘れられないその優しい笑顔と、人間を愛する彼の心を特に思い出させる――と語って下さったことが非常に印象的であった。

●《Kの像》

《雛人形》《雪景色》を描いた翌3月、柳瀬は市ヶ谷刑務所へ収監されるが、逮捕前から病を患っていた小夜子夫人の病状が著しく悪化していく。8月、小林や柳瀬の古い友人である弁護士の尽力により、3日間の勾留停止となった柳瀬は、病院で夫人と対面することができたが、直後に小夜子夫人は息を引き取った。柳瀬はその死に顔をスケッチに留めた[4]。そして、今後政治運動や漫画の執筆はしないことを約束することで、その年の暮れには保釈となった。

昭和9年（1934）に入り、小林たち友人は、画家としての再起を促すべく、柳瀬に油絵を描くように勧め

るが、柳瀬にはなかなかその気は起こらない。小林は、内田巌、大河内信敬を通じて、松下春雄という画家が亡くなったので、西落合にあるその家が借りられるように段取り、その結果、柳瀬は初めてアトリエのある家に暮らし始め、洋画家らしい生活スタイルを手に入れる。

そんな6月のある日、アトリエで小林は「俺の肖像を描いてくれ」と頼むと、柳瀬は「今すぐはじめよう」と答え、その場にあった有島生馬翻訳のエミール・ベルナール著『回想のセザンヌ』を読むポーズを小林に取らせて制作を開始した。1週間ほど通ってその絵は完成し、絵の裏に「No.1」と赤い絵の具で大きく書いた。最後にワニスを塗るつもりが、柳瀬が油を間違えて塗ったため絵が薄くなってしまい、二人とも不機嫌になった——というオチがあるが、小林は戦後になってこの絵を譲り受けた。これが《Kの像》である。「No.1」という書き込み（図10）は、10年のブランクを経て、再び絵筆をとったことを意味するもので、ここから、のちに「第2次油絵時代」と呼ばれる、亡くなるまでの10年余りの新たな創作活動の歩みが始まる、まさにその重要な転機となった象徴的作品であることは、言うまでもない。

3　本コレクションの意味

柳瀬はその45年という長くはない生涯において、多面的で複層的でしかも膨大な仕事・作品を手がけた。その中に置いてみると、本コレクションはきわめてパーソナルな動機で描かれたものばかりで、彼の激動の画業においては、小品が多いこともあって、比較的地味な存在に映る。逮捕前までの、あまりに多彩で圧倒的な画業と比較して、相対的に評価が低くなされてきたことも否めない。

しかし、逮捕、妻の死、保釈、再起…と彼の人生で一、二を争うほどに重大な転機であった時期に描かれた作品たちであり、前述したような獄中でのエピソードにも象徴されるように、数々の苦境においても、人を愛し、信じ、自己を見失わなかった彼であるから、画面に漂う仄暗くも静謐なトーンには、それまでの自己を否定し封印するような失意の表れでは決してなく、画家として再び生き直そうとする柳瀬の、手探りながらも確固たる意志を感じずにはいられない。

「柳瀬の生涯を完全に述べることは容易に出来る業ではない。しかしどうしてもしなければならぬ仕事だ。（中略）この仕事は、一人や二人の個人の力ではむずかしいと思う。忠実な人々が五年十年の時間をかける必要があろう。」(5)と小林が言うとおり、柳瀬の画業は単線的には捉えられない。そのためには、公私にわたる多方面での活動、多彩なネットワークをそれぞれ丹念に調査し読み解いていった上で、統合・俯瞰していく作業が不可欠である。無二の親友であり、柳瀬の重大な理解者・証言者である小林勇が大切に保管していたこれらのコレクションが当館に収蔵されたことで、さらなる柳瀬正夢研究の進展に寄与したいと願うばかりである。

本コレクション収蔵及び本稿執筆にあたり、小林勇長男・小林尭彦氏、長女・小松美沙子氏にご協力・ご教示を賜りました。最後に記して感謝いたします。

註

（1）小林勇「ねじ釘の画家―柳瀬正夢と子供たち―」『雨の日』文芸春秋社、昭和36年（1961）及び「柳瀬正夢のこと―「ねじ釘の画家」補遺」『芸術新潮』29巻10号、昭和53年（1978）　※ともに、のち『小林勇文集』第八巻、筑摩書房、昭和58年（1983）に所収。

（2）前掲（1）「ねじ釘の画家―柳瀬正夢と子供たち―」には、「柳瀬正夢にはじめて会ったのは一九二八年即ち、昭和三年である。そのとき柳瀬は二十九歳であり、私は二十六歳であった。最初の記憶はない。その年、私は岩波書店をやめて自分で出版屋をはじめた。」との記述があるが、鉄塔書院創業は昭和4年（1929）4月なので、厳密にはどちらの年か判断しがたいが、本稿では小林の記述に従い昭和3年としておく。

（3）小林勇「鉄塔書院と猫」『鉄塔』昭和8年（1933）3月号

（4）このスケッチは、《[死の床につく小夜子像]》（武蔵野美術大学 美術館・図書館蔵）として現存する。

（5）前掲（1）「柳瀬正夢のこと―「ねじ釘の画家」補遺」

※図9は『柳瀬正夢1900－1945』展覧会図録（北九州市立美術館、神奈川県立近代美術館 葉山、愛媛県美術館／2013年）より転載しました。

図1　《黒の毛繕い》
昭和5年（1930）頃

図2　《雛人形》
昭和8年（1933）

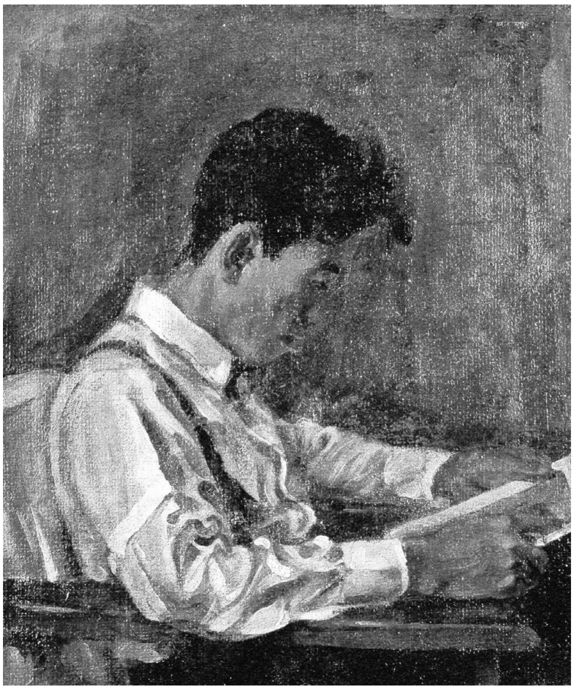

図3　《Kの像》
昭和9年（1934）

図4
《人形（お使ひ）》
1930年代

図5
《魚》
1930年代

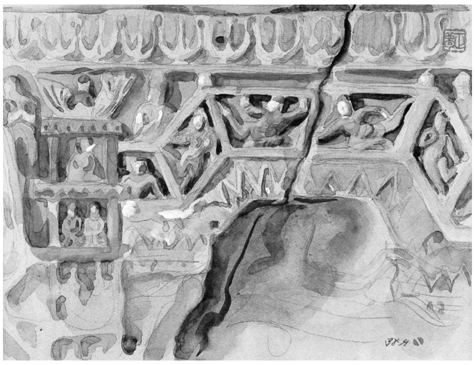

図6
《大同の石仏　第一窟西面壁の一部》
昭和13年（1938）

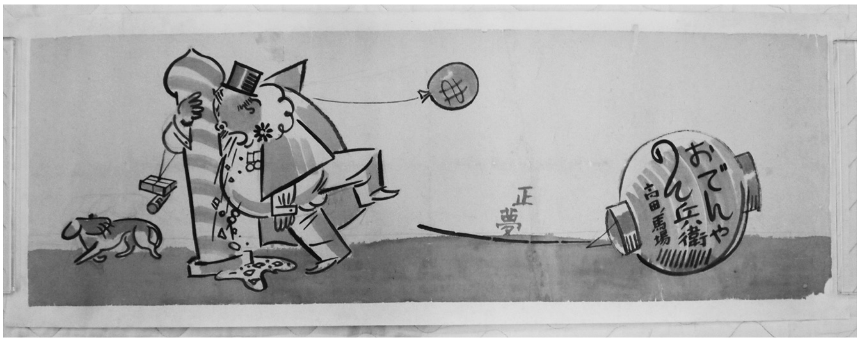

図7
《おでん屋のん兵衛（手拭い原画）》
制作年不詳

図8
《鐘馗》
制作年不詳

図9
《雪景色》
昭和8年（1933）
個人蔵

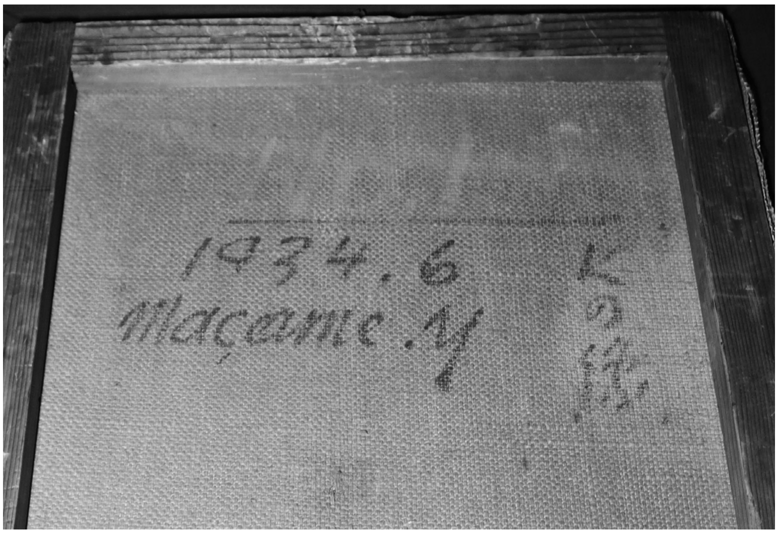

図10
《Kの像》キャンバス裏面のサイン